

## 教職のための道德教育を考える —「教育実習事前事後指導」の授業を通して—

Considering Moral Education for Teaching Profession: Through the Lessons in  
the “Guidance and Reflection to Practical Teaching”

綾井 桜子  
Sakurako AYAI

### 要旨

本稿の目的は、児童教育学科の教職科目（3年次、通年・必修科目）である「教育実習事前事後指導」の授業にて筆者が担当した内容についてまとめるとともに、道德教育をめぐる現在の教育界の動向を視野に収めながら、当該内容がもちうる意義について、特に、教材研究という視点から考察を加えることにある。

「教育実習事前事後指導」（オムニバス）の担当回では、教育実習に向けた道德の授業づくりを扱った。扱った読み物教材（資料）は、埼玉県三大偉人の一人に数えられる塙保己一に関するものと、アテネ・パラリンピックでの金メダリスト高橋勇市選手に関するものである。前者は、主として、優しさという主題（道德的価値）を扱う教材であり、これについては、歌唱、語源、歴史的背景、ゲストティーチャーによる説話という観点から教材研究が可能であることをDVD授業映像をもとに例示した。後者については、主として、よりよく生きる喜びという主題（道德的価値）を、また副主題として「生命の尊さ」を扱う教材として解釈し、テーマソング（音響）の利用、映像、書籍（児童用図書）、オリンピック・パラリンピックに関する時事情報などから教材研究が可能であることを例示した。今日の「多角的教材研究方法論」に照らすならば、これらの教材研究は、いずれも「文化的方法」（教材と私たちの生活とのかかわりを調べる）および「発生的方法」（本稿に即して言えば、塙保己一やパラリンピックに関する知が発展してきた歴史ならびに語源を扱う）に該当するものである。そのうえで道德教育をめぐる近年の動向から、本稿で扱った教材（資料）を含め、ノンフィクション教材（資料）は、「物事を多面的、多角的に考える」ことを可能するという意味で、新しい道德科の主旨に合致し、道德科が目指す「深い学び」に有効な教材であることを指摘した。

## 1. はじめに

本稿の目的は、児童教育学科の教職科目（3年次、通年・必修科目）である「教育実習事前事後指導」の授業（オムニバス）にて筆者が担当した内容についてまとめるとともに、道德教育をめぐる現在の教育界の動向を視野に収めながら、当該内容がもちうる意義について、特に、教材研究という視点から考察を加えることにある。

周知のように、「教育実習事前事後指導」（小学校）は、教育職員免許法で定める小学校の教育実習に関わる事前事後の指導を行うことをねらいとする科目である。シラバスに明記されているように、本科目は、教育実習の目的と進め方、教育実習に臨むための心構えをはじめとする講義、演習、教育実習後の学習についての内容を中心とする。教育実習の進め方に関しては、実際に教壇に立つことを想定して、実習教科の学習指導案の作成や模擬授業の実施も含まれる。2017年度前期「教育実習事前事後指導」では、教育実習に向けた授業づくりとして、国語科と道德科あわせて6回の講義および演習が実施された。本稿においてとりあげるのは、このうち、筆者が担当した道德科についての講義・演習（3回分）である。

児童教育学科では、「教育実習事前事後指導」（前期）と同じ時期にあたる、3年次の前期に、教職科目（必修）の「道德教育A」を学生は履修する。「道德教育A」でも、小学校の道德授業を想定した学習指導案の作成に加え模擬授業に学生は取り組むことになるが、「道德教育A」では、道德教育についての本質や理念について理解をしたうえで、道德科における指導の仕方を学ぶ。学習指導案の準備から完成に至るまで、多くの場合、学生は、小学校学習指導要領に示される道德科の内容項目のうちの一つについて、それも一つの教材をじっくり検討しながら作成することになる。もちろん、「道德教育A」では、他の学生が行う模擬授業を参観、検討するなかで、複数の内容項目を理解し、教材の活かし方なども学ぶことになるが、一人の学生が、様々な種類の模擬授業を想定して、複数の学習指導案を作成するのに必要な時間を「道德教育A」のみで確保することは不可能である。「教育実習事前事後指導」の一部として行った道德科についての学習は、「道德教育A」では扱いえなかった別の道德的内容項目、別の教材を扱い、授業づくりにつなげるための機会となるのであり、この意味で学生にとっては「道德教育A」の補完となり、かつ半年後に行う小学校教育実習での事前準備となりうる。

## 2. 「教育実習事前事後指導」における道德科の授業づくり ―教材研究のための検討

周知のように、平成27（2015）年3月に学校教育法施行規則の改正によって、「特別の教科 道德」つまり道德科が誕生した。従来、教育課程上、「領域」の一つとして実施されてきた「道德の時間」は、この改正によって、教科、それも「特別の教科」への転換が図られることになった。この転換によって生じた変化は、「考え・議論する道德」への転換、学習評価の導入も含め、多数あるが、さしあたり、ここでは次の点を挙げたい。それは、道德授業の教科化に伴い、それまで「資料」と呼ばれてきた、道德授業で用いられる読み物などは、より積極的な意味で「教材」として位置付けられるようになったことである。主たる「教材」としては教科書が用いられることは言うまでもないが、新しい『小学校学習指導要領』（平成29年3月全面改訂）が記すように、多様な教材の開発と創意工夫ある活用が求められることになった。この点についての具体的な検討は次章（3章）に譲ることとし、「教育実習事前事後指導」にて扱った教材<sup>1)</sup>について、授業内容に即して、以下、記述することにする。

(1) 読み物教材(資料)「塙保己一 ―やさしさを力にかえて―」(出典『彩の国 どうとく きょうもげんきに』)を用いた学習

第1回目は、洪沢栄一や荻野吟子と並んで、埼玉県の大偉人の一人に数えられる塙保己一に関する教材を扱った。周知のように、塙保己一は、江戸時代に活躍した盲目の国学者である。1746年に現在の本庄市に生まれ、7歳で病により失明し、12歳で母を亡くし、失意のなか、15歳で江戸に出て、学問の途を目指し、学問の発展に尽くした。特に、塙保己一が34歳のときに手がけ、その後41年間もの歳月をかけて出版した『群書類従』は、わが国の貴重な記録を編纂したものとして知られ、今日に至るまで活用されてきた<sup>2)</sup>。塙保己一の生き方は、私たちにとって進むべき道を示すとして、埼玉県の小学校道德授業で扱われることが多い。今回は、埼玉県独自の道德教育教材資料集である『彩の国の道德』<sup>3)</sup>より、第2学年を対象とした教材(「塙保己一 ―やさしさを力にかえて―」『彩の国 どうとく きょうもげんきに』)を使用した。『彩の国の道德』では、第2学年の教材のほか、第5学年対象の教材としても、塙保己一が扱われている(教材名「盲目の学者―「群書類従」にいだんだ塙保己一―」)。

「教育実習事前事後指導」における道德科授業に向けた準備(第1回)のためにこの教材(資料)を選んだのは、直接的には、次のような理由からである。埼玉県の小学校教員志望の多い児童教育学科の学生にとって、塙保己一は身近な存在であり、学生はその生涯も含めてよく知っていること、また、とくに近年では、特別支援学校教諭免許取得を目指して学ぶ学生が多く、塙保己一については、埼玉県立特別支援学校塙保己一学園を知るなかで学んでいるためである。

筆者が担当した第1回目の授業では、学習の到達目標を、この教材(資料)を用いた道德の授業を構想すること、とくに学習指導案(略案)の大部を占める学習指導過程(1. 導入、2. 展開、3. 終末)を具体的にイメージできるようにすることにおいた。そのために、第1回授業時には、上記の読み物教材(資料)に加えて、同一内容を扱っている道德授業DVD「優しさについて 塙保己一」(埼玉県教育委員会制作)を視聴し、これにもとづいて学習指導案を書いてみることを具体的な課題とした。

①授業映像を視聴することの意味

授業映像<sup>4)</sup>を視聴することは、教職を目指す学生にとって大きく、二つの意味があると考えられる。第一には、先にも触れたように、授業映像は、学習指導案を作成するための具体的なイメージを得ることを可能にする。映像化された授業は、ある意味、授業のモデルである。それを単に、モデルとして受け止めるのではなく、当該授業は、なにゆえに優れているかを学生が自ら考え、学習指導案として構造化するための機会として意味をもつ。

一般に、道德科の学習指導案作成の仕方を学ぶにあたっては、教職に向けた、数多くの道德教育テキストが示すように、指導案の作成例に学びながら、指導案の作成に取り組むのが有効とされる。けれども、これまで「道德教育A」(旧カリキュラムでは「道德の指導法」)を担当してきたなかで筆者が実感したことは、学生は、3年次までに、他の教科の指導法を学ぶなかで学習指導案作成に何度も取り組んでいるものの、道德授業の指導案作成に関しては、他教科と異なる意味で、困難を感じる人が多いということである。なぜかといえば、一つには、道德授業は、他教科と異なり、授業内容において「道德的価値」(学習指導要領上では、例えば、友情、信頼、思いやり、感謝、公德心、公正などが該当する)を扱うからである。加えて、これらの価値を既知のもの、当たり前のものとして扱うのではなく、なぜ、当該「道德的価値」を授業で扱うことが重要か、児童の実態に照らして当該授業で扱うことはいかなる意味をもつか、等々、授業者が深く吟味したうえでなければ指導案を作成することができないからで

ある。「道徳的価値」は、私たちが日々の生活のなかで向き合っているものであるが、あえてそのことを自覚化できていないことも多く、それを児童が自覚化し、行為できるようになるための、一つの機会として道徳授業を構成しなくてはならないからである。

これらのことをすべて念頭におきながら道徳授業を設計することは、学生にとっては、少なからず困難を伴うため、段階的に、順を追って、学習を進めてゆくことが必要であると考えた。モデルとなる授業映像を視聴し、これにもとづいて学習指導案を書いてみるという、「教育実習事前事後指導」での学習は、教育実習に向けた、道徳学習指導案作成にあたっての第一ステップに位置づけられるのである。

第二に、授業映像の視聴は、教材研究という点において、学生にとって大きな意味をもつ。教材研究とは、教材を多角的に捉え、生徒の思考を捉えるための活動である（柴山 2016：174）。授業者たる教師自身が「教材や概念に関する慣習的なイメージを再検討する」と同時に、「生徒の反応を予想しつつ、問うべき課題や目標を設定するなど、自分なりの授業展開を構想するものである」（柴山 2014：105）。とくに、道徳的価値に備わる「善さ」（例えば、親切にすることはよいことだ）を確認することに終始し、授業の形式化と硬直化が問題視されてきた道徳授業にとっては、教材研究能力を養うことの重要性はことのほか大きい。教材を多角的に捉える研究能力を養うことは、授業者として、児童の多様な意見や反応を、柔軟に受け止める能力を身に着けることにつながると指摘される所以である（柴山 2016：173）。「教育実習事前事後指導」の担当授業（第一回）で扱った上記教材に照らして言えば、偉人とされる塙保己一の生き方について、その素晴らしさを理想として追求するというよりも、塙保己一の生き方（ここでは「やさしさ」）ないし、これについての教材を授業者がどう解釈し、授業展開を構想したかという、教材研究のありかたの一例を学ぶという点において意味をもつ。

## ②読み物教材（資料）「塙保己一 ―やさしさを力にかえて―」の概要、および教材解釈

教材（資料）「塙保己一 ―やさしさを力にかえて―」の概要を示すならば、次のようになる。子どもの頃、目が見えなくてもしっかり勉強をして、立派な人になるようにとの父親の言葉を胸に、保己一は、勉強をするために江戸に出てきた。けれども、目の見えない保己一が学ぶためには、人に話を聞いたり、本を読んでもらうよりほかに、また生活のためには働きながら学ぶよりほかなかったため、思うように勉強を進めることができなかった。いったん、勉強をあきらめかけた保己一を、励まし、好きな勉強を思い切りやってみよう言葉をかけてくれた先生がいた。保己一は、先生の温かい言葉に感銘を受け、人に親切にすることの大切さを学んだ。親切な心の大切さを知った保己一には、その後、様々な人が手を差し伸べ、勉学のために本を読むなど助けてくれる人も現れ、保己一は、優しさを大切にす人から慕われる立派な学者になった、という内容である。

学習指導案上の主題名は「やさしさについて 塙保己一」、内容項目は「親切、思いやり」（B-6）<sup>5)</sup>となる。ねらいは、身近にいる人に温かい心で接し、親切にする心情を育む、となる。第一回授業時には、これらのことを受講学生が単独にはなく、全員で確認することから始めた。

では、DVD 授業映像から、どのような教材研究の一例を見出すことができるだろうか。

### A. 教材に関心を持たせるための導入の工夫；「やさしさ」という主題に関連した歌の歌唱

当該授業は、「やさしさ」を主題とした歌「ビリーブ」の合唱を行うことから始まる。歌唱に始まる道徳授業は、一般的ではないが、読み物教材（資料）「塙保己一 ―やさしさを力にかえて―」について児童に関心をもたせるための工夫である。「やさしさ」という主題（道徳的価値）に関して、児童に



とって身近で分かりやすい状況からはじめる工夫でもある。ここには、第2学年の児童にとって「やさしさ」とはどのようなものとして受け止められるか、どのような心もちで「やさしさ」を主題とする教材に向き合ったらいいかについての、授業者なりの解釈を見出すことができる。

#### B. 塙保己一の生きた時代を理解する；歴史上の用語の意味を確認する

当教材は、塙保己一（1746－1821）の生きた時代である江戸時代を扱ったものである。教材を理解するために、授業では、「奥方さま」、「江戸」、「千弥」といった語句の意味が、展開場面の冒頭にてとりあげられる。また、当時にあつては、目の不自由な人が学ぶことのできる本も学校もなかったこと、学ぶためには、仕事を覚えて、学ぶための費用を稼がねばならなかったことなどが解説される。また、文字や絵だけでなく、保己一（当時は千弥といった）が当時、学ぶために江戸に出るには、三日もかかったこと、目の不自由な人が移動するには、目の見える人の肩につかまって歩くよりほかなかったことなどが、一部、児童と教師の動作化も交えながら理解を促す工夫が行われる。また、授業では、教材には示されていないものの、教師による補足説明が随所で加えられる。それは、児童が保己一の生き方を、より現実味をもって客観的に理解できるようにするための、教材に関する歴史的な説明である。このような教材研究があつてこそ、児童は、自分の周りの環境と、保己一が生きた時代とを対比させながら、感想を發表することが可能になる。

#### C. 「やさしさ」はなぜ大切かについて、さらなる思考を促す：授業終末におけるゲストティーチャーによる説話

授業展開の終末部分では、塙保己一に関する教材を離れて、ゲストティーチャーによる「優しさ」についての説話が組み込まれる。それは、ゲストティーチャーが児童と同じような年齢のころ、クラスメートにどう優しくしたのか、そのことをいま振り返って、どう思うかを児童に語るものである。ここには、身のまわりの人に優しくするという本授業の主題を、児童の身のまわりでもなく、保己一の身のまわりでもなく、他の状況におきかえて、多面的、多角的に考察するにはどうしたらよいかという、授業者の教材研究のありようが反映されている。ゲストティーチャーが実際に経験したことについて話すことで、「やさしさ」を児童に一層、印象づけ、考えやすくなると言える。

#### （2）教材（資料）「いのち輝いて ―全盲のランナー高橋勇市―」（出典『道德ノンフィクション資料』）を用いた学習

「教育実習事前事後指導」の担当授業（第2回）は、小学校第5・6学年を対象とした教材「いのち輝いて ―全盲のランナー高橋勇市―」（永田繁雄・山田誠編『道德ノンフィクション資料』図書文化、2012年、70－74頁）を扱った。第2回は、授業映像の助けを借りずに、教材研究の仕方を探求し、学習指導案（略案）の作成に取り組むことを課題とした。

##### ①教材（資料）「いのち輝いて ―全盲のランナー高橋勇市―」の概要、および教材解釈

本教材は、2004年のアテネ・パラリンピックのフルマラソンにて、金メダルに輝いた全盲のランナー、高橋勇市氏の生き方を内容とするものである。以下、その概要について示す。

高橋勇市氏は、1965年に秋田県横手市に生まれ、中学・高校生時代は陸上の練習に励んでいた。けれども17歳のときに難病（網膜色素変性症）にかかり、20歳までに失明するであろうとの宣告を受けた。

前向きに生きようと努めつつも、ショックと不安、絶望感から自暴自棄になった高橋氏を支えたのは、母親をはじめとする家族の支えであった。

マッサージ師として自立して仕事をしていた20代のある日、アトランタ・パラリンピックにて、全盲の日本人選手がマラソンにて金メダルを獲得したニュースに大きく心を動かされた。自分もパラリンピックに出たいとの希望を抱いた高橋氏は、視力のいっそうの低下による困難にも負けずに、約10年にわたる練習を続け、アテネ・パラリンピックへの出場権を獲得する。このように本教材は、高橋勇市選手がパラリンピックにて金メダルを獲得するまでの苦難、葛藤を描いたものである。

では、実際に、本教材を用いた授業をどう構想すればよいだろうか。本教材の出典先である『道徳ノンフィクション資料』には、この教材についての学習指導案も例示されている（主題名「かけがえのない命」）。当学習指導案は、本教材を新学習指導要領の示す道徳内容項目のうち、D「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」のなかの「生命の尊さ」、すなわち「生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること」（D-19）という主題に関連するものと解釈している。たしかに、本教材は、失明を眼前にした高橋勇市氏が、生きていることの意味を見失い、母の言葉によって、命の大切さに気付く場面も扱っているという点では、「生命の尊さ」を大切に生きてゆく心情を育てるに適している。けれども、見方によっては、新学習指導要領の示す道徳内容項目のうち、同じくD「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」のなかの「よりよく生きる喜び」、すなわち「よりよく生きようとする人間の強さと気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じることに」（D-22）を扱ったものとしても解釈しうる。

次章でみるように教材の多面的解釈が、新しい道徳科では求められていることからして、「教育実習事前事後指導」の担当授業（第2回）では、本教材を、「よりよく生きる喜び」（D-22）を、主たるねらいとするものとして解釈し、授業を構想することを試みた。前回と同様、学習指導案の展開課程を記述することを具体的な課題とするが、先んじて、学習指導案中の主題名、ねらい、教材（資料）観を次のように例示した（以下、箇条書きとする）。

- ・主題名：「夢に向かって生きる」【D-22 よりよく生きる喜び】
- ・ねらい：障がいや困難、苦難に負けず、夢に向かって前向きに生きてゆこうとする心情を育てる
- ・教材（資料）観：本教材では、視力を失ったことの絶望感から自暴自棄になる人間の弱さ、もろさが描かれているとともに、困難、苦難を克服し、新たな夢に向かって自分らしく、よりよく生きようとする高橋選手の姿が描かれている。この高橋選手の生き方は、児童に多くの感動と勇気を与えることができる。将来への夢と現実のはざまで悩みや迷いも持ち始めるであろう高学年の児童にとって、金メダルを獲得したヒーローとしての姿のみならず、等身大の人間の姿をも伝えてくれる教材である。

## ②本教材を用いての教材研究のありかた（例）

本教材の出典先である『道徳ノンフィクション資料』には、学習指導案ほか、授業展開には、どのような教材研究が必要となるかが、授業の工夫とともに、次のようなかたちで例示されている。一つには、本教材を用いる道徳授業の事前の活動として、アイマスク体験を行い、目が見えないとはどういうことなのかを児童が感じ取る体験を行うことである。これは、教材中に描かれる全盲の高橋勇市選手の実像に迫ることができるための工夫でもある。二つには、可能であれば、高橋勇市選手をゲストティーチャーとして学校に招くことである。道徳授業の終盤に、「いのち」、「生きること」について話していただくこと（ゲストティーチャーによる説話）によって、児童においては、命を大切にしながらよりよ

く生きていこうとする心情を高めてゆくことが期待できる。三つには、アテネ・パラリンピックにて高橋選手がゴールしたときの映像を授業展開にあわせて視聴することである。実際の映像をみることによって、児童が臨場感をもって、高橋勇市選手の姿に迫ることが期待できる。

「教育実習事前事後指導」の担当授業（第2回）では、以上、挙げた教材研究について紹介をしたうえで、他に、どのような教材研究がありうるかを考えることとした。以下は、授業で扱った教材研究の一例である。

#### A. 「パラリンピック」とは；語源について

道德授業で扱う主題、あるいはねらいに迫るためには、先述した塙保己一の授業映像にみられるように、読み物教材（資料）中に示される、主題に深く関係する言葉について、児童に補足説明を行うことが必要となる。高橋勇市選手の生き方を扱った本教材の場合は、「パラリンピック」について、語源とあわせて、語句の意味を確認することも、授業の導入時に必要になるであろう。「パラリンピック」については、2020年東京オリンピック、パラリンピックの開催を前に、広く関心が高まっているが、改めて、授業の際に語源や、意味を確認しておくことも、教材への児童の関心を高めることにつながる。一般に、「パラリンピック」が「もう一つのオリンピック」であることは児童（高学年）にとっても周知であろうが、語源や言葉の意味について簡単に触れておくならば、教材への関心を、近い将来に開催される2020年東京「パラリンピック」への関心とつなげることもできるであろう。

中学生であれば、辞典等から言葉の意味を調べる方法も考えられるであろうが、児童への分かりやすい説明として、今回は、高橋勇市選手についてのノンフィクション『夢をあきらめない 全盲のランナー・高橋勇市物語』のなかのコラム「「パラリンピック」について」（池田2008：158-159）から、補足説明資料を用いた。パラリンピックは障がい者を対象とした、世界最高峰のスポーツ競技大会であること、4年に一度、オリンピック競技大会の終了直後に同じ場所で開催されていること、1948年に、英国にて、車いす使用者の治療やリハビリの一環として行われたアーチェリー大会として行われたのが始まりであること、次第に出場者も車いす使用者以外に広がり、競技種目も増えたことにより、「平行して」という意味のパラレル（Parallel）とオリンピック（Olympic）をあわせ、「もうひとつのオリンピック」という意味で解釈されるようになったことなどが、授業者によって補足されてよい。また2020年大会開催準備に向けた、東京都オリンピック・パラリンピック準備局によるホームページ<sup>6)</sup>からも、教材研究に必要なパラリンピック情報を得ることができる。

#### B. アテネ・オリンピック テーマソングの活用

児童にとって「栄光の架橋」は、学校での行事にも利用されるほか日常でも身近な曲である。「栄光の架橋」が2004年アテネ五輪のNHK公式テーマソングであったこともあわせて、高橋勇市選手についての本教材を用いた道德授業の導入のための工夫として活用することも考えられる。

#### C. 「伴走」について

本教材を児童が理解するうえで必須となるのは、視力がさらに低下した高橋選手を支えた「伴走者」の存在である。「伴走者」が、伴走ロープを絆として視覚障がい者の「目」となり、練習から大会に至るまで、選手の心身両面での支えとして重要な役割を果たしていることを児童に気づかせることができるよう、授業者（教師）が基本を理解し、情報を収集しておくことも必要となる。教材中に登場する、

高橋選手を支えた「伴走者」の中田崇志さんについては、日本経済新聞に掲載の記事「伴走の第一人者・中田崇志さん ランナーの心 声掛けで点火」(2017年5月30日掲載)のなかでも紹介されている。同紙面には、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催を機に、視覚障がいスポーツへの関心の広がりについての記事「視覚障がい者の「伴走」学ぼう」も掲載されており、市民を対象とした「伴走」講習会・練習会が各地で開催されるなど、市民ランナーにおける「伴走」への関心の高まりについて取り上げられている。こうした時事情報の収集も、教材研究には必要となる。また、「伴走」とは何かを分かりやすく児童に示すために、高橋選手と伴奏者を結ぶ「伴走ロープ」の写真<sup>7)</sup>を提示することも、本教材についての児童の理解を助けるために有効である。

#### D. 高橋勇市選手について

本教材をもって、児童が自身の生き方を深く考える機会とするためには、児童自身が、高橋勇市選手について広くかつ多面的に知る環境を整備しておくことも必要である。児童用図書としても扱える先述のノンフィクション『夢をあきらめない 全盲のランナー・高橋勇市物語』(岩崎書店、2008年)では、北京パラリンピックをめざして努力し続けるほか、小学校はじめ児童に自らの生き方を伝えるなど、アテネ・パラリンピック後の高橋選手の活躍が取り上げられている。

以上、「教育実習事前事後指導」の担当授業(第2回)において例示した教材研究についてまとめた。現在、道徳科の成立に伴い、従来よりも内容面において、より広い文脈において教材を調べ、捉えなおす試みが求められている。そうした試みの一つ、「多角的教材研究方法論<sup>8)</sup>」に基づくならば、上に挙げたA～Dの教材研究のなかで、とくにBおよびCは、「文化的方法」に位置づけられるものである。ここでいう教材研究における「文化的方法」とは、取り扱うテーマや道徳的価値について、児童の実態と関連させながら検討し、当該テーマや道徳的価値をめぐる文化的・社会的背景を考えること、新聞、ニュース、インターネットなどの情報を調べることで、児童にとって身近な文化である童話・アニメ等に触れることを意味する。アテネ・オリンピック テーマソングを扱うB、および高橋勇市選手についての児童用図書、「伴走」および伴走者中田氏についての新聞記事を扱うCは、それゆえ、授業で扱う教材について、生徒の身近な文化や、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催という、児童をとりまく現実に深く関連させながらアプローチすることを可能にし、児童の実態に応じた教材となりうると考えられる。

### 3. 新しい道徳科に求められる教材の選定・開発・活用について

以下においては、視点を変えて、このたび新しく誕生した道徳科では、教材の選定・開発・活用に関して、どのようなことが求められているのかを確認し(第3回の授業内容に該当)、そのうえで、上にみてきたところの内容が、どのような意義を持ちうるかを検討することにした。

まず、「小学校学習指導要領」(平成29年3月)は、その第三章「特別の教科 道徳」において教材に関する留意事項について、次のように示している。

「児童の発達の段階や特性、地域の実情等を考慮し、多様な教材の活用に努めること。特に、生命の尊厳、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化への対応等の現代的な課題などを題材とし、児童が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材の開発や



活用を行うこと。』

前章であげた、塙保己一に関する教材は、地域の実情ほか、先人の伝記であるという点で、高橋勇市選手に関する教材は、生命の尊厳、スポーツという点で、上記「小学校学習指導要領」が示すことさらに該当する。両教材は、つづいて同じく「小学校学習指導要領」（平成29年3月）が示すところの、道德科の教材は、「人間尊重の精神にかなうもの」でありつつ、「悩みや葛藤等の心の揺れ」を扱い、「人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるものである」と言える。

道德科の教材の充実に関しては、「小学校学習指導要領」（平成29年3月）に先立つ、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（平成28年12月21日）においても扱われている。本答申は、「特別の教科」（道德科）の設置が、「考え・議論する道德」への質的転換を図るものであるとしたうえで、教材、とくに「生命の尊厳」と「スポーツ」に関する題材を取り上げた教材について、その重要性を次のように指摘している。

まとめると、まず、「生命の尊厳」については、「生命のもつ偶然性、有限性、連続性から、生命の尊重や感謝、よりよく生きる喜びなど様々な道徳的な問題を考えることができる言わば道徳の内容全体に関わる事項である」と指摘する。「身近な人の死に接したり、人間の生命の尊さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験が少なくなっていると考えられる現代」であるだけに、生や死、生命の尊さを扱う教材がいっそう重要であるという認識がここにはある。また、「スポーツ」に関しては、「オリンピック・パラリンピックなど、世界を舞台に活躍している競技者の公正な態度や苦悩、努力」は、児童が道徳的価値の理解を深め、自己を見つめるうえで有効であることが示される。言い換えると、世界を舞台に活躍する選手が、等身大の人間として苦悩し、それを乗り越える姿を知ることが、児童にとって、ある程度、将来あるいは現在の自己に重ね合わせることができ、自己を見直し、課題の解決への意欲を喚起するであろうことが、「スポーツ」を扱う教材には期待されているということである。

しかし、だからといって、教材として生命やスポーツを扱う題材を選べば、道德科で求められる教材の活用にもそのままつながる、というわけではない。「何が問題となっているのか」、「あなたならどうするか」、「どうしてそうするのか」を問い、問題解決的な要素を取り入れることが求められている道德科においては、渡邊（2017）が指摘するように、教材を固定的に捉えるのではなく、問題となる部分、課題となる部分で教材を区切って、主人公のぶつかった問題や課題に向き合わせるなどの工夫が必要である。それは、読み物教材の「起承転結」のなかで、従来の道德授業の多くがそうであったように「結」の部分に着目するというよりは、「転」の部分に着目し、児童をして「問題意識を強く惹起させるようなテーマ性を織り込むように工夫」（永田・山田 2012：11）するということでもある。このたび担当した「教育実習事前事後指導」の授業では、文部科学省によって例示されている「道德科における質の高い多様な指導方法<sup>9)</sup>」のなかの「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」をとりあげ、「問題解決的な学習」を取り入れるまでは至らなかったが、以後、同教材を、問題解決的な視点からとりあげるにあたって、そのような工夫を行ってゆきたい。また、生命尊重という普遍的な道徳的課題をとりあげるにあたって、価値観の相対化が顕著な現代においては、児童が単独で、自己の生き方を省みるだけではなく、「身近な他者と共同して考える」（渡邊 2017：123）ことで、さまざまな受け止め方、価値観に触れる機会を取り入れる工夫もこれまで以上に必要であると考えられる。

ところで、本稿でとりあげた二つの読み物教材（資料）は、いずれもノンフィクションである。以下では、ノンフィクション教材（資料）の持ちうる意義について、永田・山田ら（2012）が論じることが



らに照らして述べることにしたい。

一般に、読み物教材（資料）のなかで、ノンフィクション教材（資料）の占める割合は、総じて少ない。多くが、物語作品で占められている。2016年に改訂された『私たちの道徳』をみても、高学年よりも、低学年において、物語作品の占める割合が大きい。また、道徳授業でとりあげられる、低学年を対象とした物語作品の多くにおいて、登場人物は、動物を擬人化したかたちで扱われる。物語作品とノンフィクションのどちらが児童の心を揺さぶるかは、当然のことながら、一概に言えることではない。けれども、ノンフィクション教材（資料）は、軽んじられるものではなく、適切にかつ慎重に扱うならば、主題を自分の問題として真剣に考えるこのできる利点を持ち、児童の心を大きくゆさぶる「力ある資料」（永田・山田 2012：13）となりうることは強調にあたいます。適切にかつ慎重に扱うとは、児童に何を問題として考えさせたいか、ねらいを明確にすることは言うまでもないが、「予見や予断で内容を構成したり活用することのないよう」事実や史実を尊重すること、授業でとりあげるにあたって、事前の十分な調査を行う（永田・山田 2012：11）ということである。

もう1点重要なことは、ノンフィクション教材（資料）は、現実の出来事を扱っていることからして、教材のなかに「複数の道徳的価値が含まれている場合が多い」ということである。『道徳ノンフィクション資料』には、例えば、新潟中越地震の際に、大量の岩にはさまれたワゴン車の中から命がけで男児を救出したハイパーレスキュー隊員について扱った教材（資料）がある。道徳授業では、45分のなかで、一つの道徳的価値にねらいを絞ることが一般的であるとされるが、この教材にみるように、危険を承知で、困難のなか勇気をふりしぼる姿（勇気）と、人命救助への強い気持ち（生命の尊さ）を切り離して扱うことは、道徳授業として有効ではないと山田は指摘する（山田 2012：15）。本稿に照らして言えば、高橋勇市選手を題材とした上記教材（資料）には、「希望と勇気、努力と強い意志」（A－5）「生命の尊さ」（D－19）、「よりよく生きる喜び」（D－22）といった、少なくとも、三つの道徳的価値が含まれている。複数の道徳的価値について考えることは、たしかに低学年では難しく、その点からして、ノンフィクション教材は、高学年により向いてはいるだろう。けれども、ノンフィクション教材は、現実には複雑で様々な道徳的価値から成り立っているということを知り、より深く教材について児童が考える機会となる有効な教材である。以上から、ノンフィクション教材（資料）は、「物事を多面的、多角的に考える」ことを可能にするという意味で、新しい道徳科が目指す「深い学び」に有効な教材であると言えるだろう。

#### 4. おわりに

以上、「教育実習事前事後指導」において、学生が半年後に控える教育実習の準備となるべく行った道徳の授業づくりの内容についてまとめ、特に、教材研究という観点から検討を試みた。検討を通して明らかになったのは、従来の「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」（道徳科）として新たに位置づけなおされることによって、道徳授業には、従来とは異なる新しい教材研究、とくに、教材についての多面的で多角的な見方を可能にし、児童の思考を促すような教材研究が求められているということである。本稿の内容を上記担当科目で扱った時期は、道徳科の完全実施前の移行期間であり、道徳科のために作成された読み物教材は限られていたため、従来の「道徳の時間」のために作成された読み物資料を扱った。扱った資料は、いずれも、従来型の、道徳的心情を育むことを目的として作られたものであったが、これを、新しい道徳科で求められる指導方法の一つである「読みものの教材の登場人物への自我関

与が中心の学習」に置き換え、教材研究を試みた。新しい道德科では、とくに「問題解決的な学習」も求められており、今後は、この観点からも、各種、教材にアプローチしてゆきたい。道德科をめぐる近年の教育動向からすれば、今後は、これまで定番とされてきた読み物資料も、固定的な解釈ではなく、道德科の主旨に合わせ、新たに解釈され、教材研究が進められてゆくべきであろう。また、今回、ノンフィクション教材（資料）をあえて扱うことによって、ノンフィクション教材（資料）のもちうる可能性についても、いくつか明確化することができた。ノンフィクション教材（資料）においては、扱われる主題と、児童の現実とのあいだに何かしらの接点を見つけ出しやすく、児童が主題について現実味をもってアプローチすることができる。加えて、ノンフィクション教材（資料）には、複数の道德的価値が含まれているがゆえ、児童が多角的な角度から問題（道德的問題）を考えることを可能にする。本稿を通じて得られた知見を、教職のための道德教育において今後、活かしてゆきたい。

### <参考文献>

- 池田まき子（2008）『夢をあきらめない 全盲のランナー・高橋勇市物語』岩崎書店。
- 柴山英樹（2014）「中学校の道德教育における教材研究と指導方法に関する一考察―小学校読み物資料を中学校で読み直すための試案―」『教育学雑誌』（50）97-108頁。
- 柴山英樹（2016）「『特別の教科』化に伴う道德授業」羽田積男・関川悦雄編『道德教育の理論と方法』弘文堂、170-182頁。
- 永田繁雄・山田誠編（2012）『道德ノンフィクション資料』図書文化。
- 羽田積男・関川悦雄編（2016）『道德教育の理論と方法』弘文堂。
- 渡邊満（2017）「道德科の授業づくりと教科書等の教材の活用」「考え、議論する道德」を実現する会『考え、議論する道德を実現する！』図書文化。
- 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）（平成28年12月21日）
- 埼玉県教育委員会『彩の国の道德』（<http://www.pref.saitama.lg.jp/f2209/doutoku-text/> 平成29年5月10日確認）
- 文部科学省「小学校学習指導要領」（平成29年3月）（[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661\\_4\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf) 平成29年12月22日最終確認）
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編」（平成29年6月）（[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/11/29/1387017\\_12\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/11/29/1387017_12_3.pdf) 平成29年12月22日最終確認）
- 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版社、平成30年2月。
- 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道德編』廣済堂あかつき、平成30年2月。
- 文部科学省「道德教育アーカイブ」（<https://doutoku.mext.go.jp/> 平成29年11月24日最終確認）
- 「伴走の第一人者・中田崇志さん ランナーの心 声掛けて点火」『日本経済新聞』（2017年5月30日掲載）

### 註

- 1）教材について、これまで「道德の時間」に位置づける際には、資料と呼ばれるほか、教材（資料）と呼ばれてきた。特に、読み物については読み物資料と呼ばれることが多かった。平成29年度は、道德科完全

実施に至る移行期に該当することもあり、本稿では、従来、資料とよばれてきたものは、読み物教材（資料）と表記する。また、従来の「道徳の時間」と関連性の高いもの、および引用部分については資料と表記し、ほか、文脈に応じて、教材（資料）、教材と表記する。

2) ここでは、埼玉県一史料館ホームページ中の「埼玉保己一の生涯」([http://www.onkogakkai.com/hanawa\\_life.htm](http://www.onkogakkai.com/hanawa_life.htm) 平成29年12月20日最終確認)を参照した。

3) この教材は、埼玉県が、児童生徒の豊かな心を育むことをめざして作成したものであり、平成22年度より、さいたま市を除く県内の公立小学校にて配布され、活用されている。ホームページ上では、その一部の抜粋が公開されている

(URL <https://www.pref.saitama.lg.jp/f2209/doutoku-text/index.html> 平成29年12月20日、最終確認)。なお、これとは別に、埼玉県では、東日本大震災を題材とした教材を収録した道徳教育指導資料集「彩の国の道徳『心の絆』」も作成され、ホームページ上にて公開されている (<https://www.pref.saitama.lg.jp/f2209/doutoku-text/kokoronokizuna.html> 平成29年12月20日、最終確認)。

4) 文部科学省による「道徳教育アーカイブ」のホームページでは、「考え、議論する道徳」の授業づくりの参考となる映像資料等が公開されている。

5) 通常、道徳学習指導案では、「小学校学習指導要領」および「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」にて、4つの視点のもとに示されている内容項目（第1・第2学年では19項目、第3学年および第4学年では20項目、第5学年および第6学年では22項目）の記号のほか、番号を記入する。本教材の場合は、B-（6）、すなわちB「主として人との関わりに関すること」の（6）身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること（【親切・思いやり】）に該当する。

6) 東京都オリンピック・パラリンピック準備局によるホームページを参照。（[www.2020games.metro.tokyo.jp/](http://www.2020games.metro.tokyo.jp/) 平成30年1月7日、最終確認）。

7) ここでは、池田まき子（2008）に掲載の写真を紹介した。

8) ここでは、柴山（2014, 2016）による整理にもとづく。

9) 文部科学省によって公表されている次の資料を参照。（[www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/.../1366380\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1366380_1.pdf) 平成30年1月11日、最終確認）。